

若者のひろば 「座間事件」の背景と対策を考える

—高崎健康福祉大学健康福祉学部「教職指導」授業の中で—

昨年 10 月に発覚した「座間事件」はあまりにも残忍な事件だが、決して特異とは言えない。現代社会を象徴する事件のように思う。事件の背景について、若者の本音に接近したいと思い、「教職指導」を選択している高崎健康福祉大学健康福祉学部 3 年生の学生に分析してもらった。使った資料は、毎日新聞群馬版の記事「神奈川・座間 9 遺体 見えないつながり」（2017 年 11 月 29 日付）で、県内の高校生に杉直樹記者が聞き取りをして書いたものである。以下、学生の文章を紹介したい。（非常勤講師・瀧口典子）

☆二つの背景

この事件には大きく二つの背景・原因があると私は考える。まず一つは、「ツイッター」をはじめとする様々な SNS が発展したことである。SNS が発展したことによって、アカウントを持つ誰もがインターネット上に思ったことや感じたことなどの感情をつぶやくことができるようになった。そして今日、その SNS が発展したことによって、高校生などの若者が自分と同じ感情を抱く仲間を探したり、そうしやすいように自らの感情を更にオープンにして晒したりすることが容易な状況になったのである。

そして二つ目は、「みんなに共感してもらいたい」とか、「だよね！！ってなるのがいい」など、個人としての感情のみでは満足ができない寂しさを抱える人が増えたということである。自分の趣味や考えを多数の人と共有したいがために、若者などはそれぞれの目的別にいくつものアカウントを使い分けている。そして、それぞれのアカウントの中でそれぞれの自分がある世界を生きる。このように現実社会とインターネットの中での社会とで自己を生き分けることができるようになったこ

ともこの事件の背景としてあったのではないかと私は考える。

（社会福祉学科・諏訪部 匠）

☆本音や弱音を吐き出せる場がない

現代社会において、本音を話す機会が極端に減少したことが一番大きな原因であると考えられる。近年、家族模様や教育現場が大きく変化し、子どもたちが自らの口で自らの気持ちを話す機会が大きく減少した。そこに表れた匿名性の高い SNS の存在が子どもの本音や弱音を吐き出せる所として、浸透していったのだと思う。こうした子どもたちは「さみしさ」を抱えていて、事件の被害者やリストカットを投稿する人もその抱えるさみしさを伝える相手がおらず、SNS に投稿することで心の安定を保とうとしたのではないだろうか。こうした彼らの状況や心の不安定さが加害者にうまく利用され、起こってしまった事件だと考えられる。

しかし、こうした事件が起こってもなお、SNS の利用者が減らないのは、本音を吐きだせる場所として需要があり、今後も類似した事件が起こる可能性は否定できない。

（医療情報学科・渋谷 遥）

では、どうしたらこういう事件を防げるのだろうか

県教育委員会は、県内の公立高校と市町村教育委員会に対し、インターネット上での出会いへの注意指導や家庭内でのルール作りの推奨など、SNS 利用に注意を促す通知を出した。しかし、学生の意見や提案はより踏み込んだ建設的な提案が多かった。

☆ SNSとのつき合い方を考える機会を学校で

今の生徒はSNSがあることが当たり前でこれからもそうだと思うので、禁止だというのではなく、SNSとどうすればうまく付き合えるのかを生徒に考える機会を設けるのがいいのではないかと考えました。初めに、クラスで、SNSにはどんな危険性があるのか、生徒一人ひとり考えて発表し、楽しいだけではないと気づかせます。また生徒にSNSの危険からどのように身を守るかを考えてもらいます。次に全体集会を行い、警察の方を呼び、警察はSNSの被害をたくさん見てきているので、生徒たちが気づかなかったSNSの危険やどのように身を守れるのかを話してもらいます。

(社会福祉学科・米谷春香)

☆情報の授業でも

今まで以上に力を入れる必要がある。情報の授業では、TwitterなどのSNSの利用方法については、「こういうものがある」という感じであまり大きく触れることがなかったが、今回の事件を受けてTwitterの内部構造を学習する必要性を非常に感じた。私は、Twitterを全校生徒に利用禁止にするのは簡単だと思う。しかし、利用を禁止してもTwitterをやってしまう人は必ずいる。だったら、学校教育でSNSの危険性を知ってもらうために授業で徹底して取り入れる必要がある。

(医療情報学科・田村佳輝)

☆生徒一人ひとりとの関わりを

学校の教育では、ツイッターなどのインターネットを規制するだけでなく、生徒一人ひとりとの関わりを改めて見直していかなければならないと考える。学校や家庭などの日常生活で、生徒が悩みを打ち明けることができる環境を整えることが大切だと

思う。自分の話を聞き、受容、傾聴、共感をしてくれる人がいるだけで大きな変化があると思う。現代はインターネットが進んだことで、友人や家族の間でも直接コミュニケーションをとる機会が以前より減少しているように感じる。しかし、直接話すことでしか得られないこともある。教員は生徒一人ひとりをよく観察し、小さなことに気づき、コミュニケーションを積極的に図ることが大切だと思った。

(社会福祉学科・百瀬唯奈)

☆コミュニケーション能力の向上を

現代の中高校生は適切な人間関係が築けていないという点から、コミュニケーション能力を向上させる取り組みが必要であると思う。授業でグループワークを行なうなど、そういった取り組みが友人を作ったりなどにつながると思う。さらに、そういった事をしていれば、ネットに頼らずに周囲に相談できる環境作りができると思う。

(社会福祉学科・原田航輝)

☆心のつながりを大切にした

クラスづくりを

資料の最後で女子生徒が述べているように、SNS、携帯電話の規制はほとんど意味のないものであり、このご時世、生徒たちにおいてスマートフォンなしで交流、生活するのは厳しいという事実がある。本音が話せないという状況が問題であるので、本音が話せる教室づくりを行う必要がある。スマートフォン以上の価値を学校が持てば、生徒たちがSNSで心を疲弊されることなく、調べ物や連絡手段として、規制せずともスマートフォンが正しく利用されるはずである。生徒たちが、この新しい技術に飲み込まれないよう、今こそ心の繋がりを大切にしたクラス作りを行う必要があると思う。

(医療情報学科・渋谷 遥)